原則も極東民衆生活の發育作用が、自然に支那自身の内部的分裂を馴致したのを、何とも妨害することは出來なかつた。關東軍は此の動搖の渦中に立ちて、日本の爲に善處したまでゝある。そこで民族自決に準ずべき滿蒙の民意一決は、充分の妥當性を認められて、國際法規の上に登錄せられねばならぬ。其の登錄手續に關し、世界の政治家が聯盟會議の席上に、雄辯のオン・パレードをなすは、全く無用の徒勞である。

滿洲國の現實的承認と共に、九ケ國條約は自然に變更せられ、日本は英米のモンロー主義に均霑して、極東に日本モンロー主義を確立せねばならぬ。而して國際經濟ブロックの對立が現前の事實として日本を脅やかす以上、滿洲國との諒解の下、彼我の利害を調節して、是に日滿經濟ブロックを完成せねばならぬ。併しそれは世界に對して敵對行爲を宣言するのではなく、世界の强大諸國と平等の立場を維持して、次に來るべき國際統制會議に强力なる發言權を保留せんが爲である。而して日本モンロー主義の合理性に對し、列國の外交家が如何なる言議を用ふるかは、別に之を氣にせずして宜しい。問題は如何にして我國が、斯の如き事業を本質的に完成するかにある。乃ち日本は現前の事實に對する列國の態度を洞察し、極東のリーヤル・ポリチックスを考慮せねばならぬ。

米國は、滿蒙問題に關する限り、未だ直ちに武力を以て日本に臨むの決意を定め得ない。しかし一九三六年、倫敦協約の期日滿了前後に於て、彼れの海軍力は日本に挑戰するの有利性を具備して來る。併も米國が活きんとする力の伸び行く方向はアラスカより滿蒙、西伯利を指し、之に對する認識は共和黨と民主黨とによりて、何等の差別あるべきでない。ハリマン契約、ノックス提言、錦愛線計畫等逐次に示されたる米國の動向は今日も亦昔日と異るべきでない。

英國は滿洲國の建設と、日滿の提携とによりて、最も大なる損害を被つたものである。滿洲國の全鐵道線路が既設未設共に日本の管理に移つてから、英國は事實上に京奉線の支配權を喪失した。張軍閥の下に立案せられたる葫蘆島中心主義の鐵道計畫が全く破壞

せらるゝに至つてから、折角和蘭營利會社の名に於て進められたる英國の葫蘆島築港は其の目的を水泡に歸せざるを得なくなつた。更に滿洲國が稅關を接收してから、全支那の海關を握つて居た英國の優越權は是に一角を毀損せらるゝに至つた。これだけを數へあげても、英國にとりて大なる權益の喪失である。日本ならば當に國民大會を開きて權益擁護を叫ぶべき所である。然るに英國は息を殺し、冷靜を持して、何等急迫せる態度を示さない。何となれば彼は歐洲に於て佛蘭西との對峙あり、印度の國境に於て露西亞の脅威あり、印度自體の不安あり、今頃滿洲問題に對して日本と抗爭するの遑なきが爲である。併し英國は嘗て隱忍しながらナポレオン一世をも葬つた、更に隱忍しながらカイゼル・ウキルヘルムをも片づけた。隱忍の裏に遠大の計畫を藏することは重厚なるアングロ・サクソンの特徵である。武力に於て未だ起たざる英國も、經濟戰場に於ては、漸く我に對して露骨なる鋒鋩を顯して來た。

露西亞は帝政時代に西伯利を略し、沿海州を取り、嘗て支那を籠絡して滿蒙に進出し黃河以北と朝鮮日本をも窺ふの勢を有して居た。それが日本との一戰に敗れて南滿を拋棄した。日露戰爭は奉天を以て決勝戰としたが、日本は戰勝の壓力によりて長春に進出し、長春を劃する一線に沿ひ、其の南方を南滿として日本に委ね、北方を北滿として露西亞の勢力範圍とした。然るに今回滿洲事變が勃發し、我軍の威力が匪賊を追擊して南北全滿洲に及ぶや、こゝに滿洲國は創設せられ、北滿に於ける露西亞の勢力範圍は新國家の領域に收められ、引て日本の武力によりて防衞せらるゝに至つた。日滿議定書によれば、北は黑龍江、西は興安嶺に沿ひて滿洲國の國防線は設置せられ、我が國軍により て之を守備することとなつてゐる。乃ち端的に觀察すれば露西亞は北滿の勢力範圍を撤退して、之を日本に讓つたのである。

米國の態度斯の如く、英國の態度斯の如く、露西亞の情勢斯の如く、滿洲國は日本を後楯にして、此等列國の睨み合ひの間に介在してゐる。日本は民族自決による滿洲國の獨立を承認しこれと協力して日滿經濟ブロックを作り、此の足場に立ちて極東モンロー

主義を確立するより以外に何等の野心もない。然るに英米は歐洲列國と共に國際聯盟に出動して、日本當然の立場を否認せんとして居る。固より今次の外交に於て日本は斷じて膝を屈せざるの決意を有して居るが、彼等の見解と我が主張とは、到底相容れざるまでに對立して居る。此時に當りて露西亞は案外現實を正視することに果敢であつた。彼は露支合辦の東支鐵道より支那を排斥して、露滿合辦に組み代へることに同意した。匪賊の討伐に東支鐵道を利用することを承認した。更に屢々日露不可侵條約を提議し、同時に滿洲國正式承認を斷行するの意を仄めかした。此等の事實を綜合すれば、露西亞が頻りに我國に好意を寄せつゝあるは疑を容れぬ所である。併し外交上に安價なる感情論は無用である。露西亞は萬難を排して第一次、第二次五個年計畫を完成せんとし、中途幾多の故障にあひて酸苦を嘗めつゝある際、外に事を構ふるを欲せずと見るが至當である。乃ち佛蘭西を始めとし、西方接壤諸國とは、既に不可侵條約を締結した。更に日本該條約を締結せんか、西に佛蘭西、東に日本の兩大勢力よりの脅威を免かるゝ次第である。露西亞は滿洲事變以後の大勢に脅やかされ、滿洲國境に大兵を集中したが、不幸にして日本と戰端を開かんか、國內の大動搖、產業の大蹉躓測り知る可らざるものがある。是に於てか彼は寧ろ辭を低くして、日本との了解を進めんことを希望して居る。日本は露西亞に感謝する必要もないが、强て之を恐怖する必要もない。不戰條約は普遍的に各國相互の不可侵を約束するが、直接日本軍が滿洲國の國境に露西亞と對峙するに至つた今日、別に日露間の不可侵條約を結ぶも不要でない。若し露西亞が之と同時に滿洲國を承認し、東支鐵道を賣却せんとすれば、これも亦日本の立場を固むる上に甚だ好都合である。南滿の動脈たる南滿鐵道六百餘哩に、北滿の動脈たる東支鐵道一千餘哩を併せて日本の所有に移せば、南北滿洲の堅實性は一層增進せらるゝ次第である。而して極東に日本と對峙せし露西亞が、その警戒を緩めて少しく西に向はんかそこは乃ち英國の最も神經を惱ます印度國境である。露西亞が東方に日本と了解を進むべしとの噂が傳へらるゝや、英國は響に應ずるが如く西藏に手を入れて、印度と西伯利との間に緩衝地帶を設

けんとして居る。露西亞は既に西伯利より南下して、トルキスタンに出で、そのトルキシプ鐵道は西藏に近く迫つて居る。若し日露の對立が極東で緩和されたら、英露の對立は印度國境に尖鋭化せらるゝであらう。一たび英露の對立が激化されたら、露西亞も英國も、首を極東に廻らすことは、益々不可能となるであらう。英露共に極東に向ふことを休めたなら、米國は一國を以て滿蒙に日本と挑むことを躊躇するであらう。乃ち日本は極東に於ける列國の勢を制すると共に、我が公明の態度を宣明して、列國の諒解を得ることが出來るであらう。

日露不可侵條約を締結して可なりとの主張は、單に露西亞よりの秋波に誘はるゝことを意味するものでない。これを端緒として、世界政策上に、日本の雄圖大略を行はんとするものである。日露問題は他の日米問題、極東モンロー主義、日滿經濟ブロックと、綜合統一的に日本の極東政策に歸納せらるべきである。併し之を實行せんとすれば、第一過激思想の宣傳が憂慮せらるゝ、第二權變測るべからざる露西亞の藏れたる野心が恐怖せらるゝ。我等の外交論は此等の憂慮と恐怖とを、總て算中に置きて、猶ほも憚る所なく、惑ふ所なきの大雄圖を行はんとするにある。若し此の雄圖なく、確信なくんば日露修好な有害無益である。更に大局より極東列國の關係を顧慮する時、日露不可侵條約は之を締結するもせざるも、日本の立場は危險である坐して危險の迫るを待つは安全の道ではない。されど進んで危險を排除せんとすれば、そこに一層の危險と障碍とがある。乃ち日本の外交は如何に聰明なる筋書を立つるも、其の政策を運用すべき强力政治の背景なき限り、進退共に危險である。英米をも憚らず、露をも恐れず、而して必ずしも之に苟合せず、之を排擊せず、正義の歩みに任せて、坦々たる大道を直往するは實に强力政治の妙用である。

五

日本は外に向つて國際正義の再建を期すべく、强力なる外交の必要に迫られて居る

が、國内に國民生活問題の難局を打開する爲にも、認識と理論の基礎に立つ强力政治の活用を翹望せざるを得ない。

今日世界の不況と人類の懊惱とは、傳統經濟主義の破綻によると認められ、通常之を資本主義の行き詰りと稱して居る。資本主義なるテクニックスは由來マルクス學派のそれであるが、マルクス派に屬せざる人までも、此のテクニックスを常用して怪まざるほど、其の意義は普遍化せられ、其の短所は嫉視せられて居る。併し所謂資本主義的實力は滿天下の惡罵を受けても動搖せざるほどに現實社會を把握し、善惡ともに一世を力制せんとするの勢を示して居る。之に對し正面より挑戰するものは社會主義である。社會主義は共產主義を以て正系となし、時にカムフラージして主張を緩和することあるも、窮極に於て國家權力を略奪し、私有財產を沒收し、社會組織を根據より覆さんが爲め、不屈の決意を包藏するものである。此の兩者の對立は絕對的でありその鬪爭は全破壞的である。然るに政治は對立せる各々の間に唯一を主張して、斷じて之を實現すべき使命を有して居る。政治は社會の爲に社會を統制すべきものであつて、そこに偏見、依姑、迷信あるを許さない、而して現代は偏見、依姑迷信の修羅場である。此の修羅場に頑强なる抗爭を繼續するものが資本主義及び共產主義なりとせば、此等を排擊し、此等を揚棄して、唯一を行はんとせば、そこに非常の强力を要すること萬々である。謂ふまでもなく資本主義も共產主義も命がけである。此等をノック・アウトして自己の大道を進まんとせば、それは今までの自由主義や形式主義の生溫い態度では到底間に合はない强力政治は實に此の混亂時代を克服して、天下を正しきに歸する爲に最も必要である。

資本主義が滿天下の痛罵を浴びながらも、今日の繁榮を贏ち得たのは、それ自身の掩ふ可らざる特長を有するからである。特長とは何ぞや、それは其の基礎に於て人類の根本性能に對して、正當なる認識を有する點である。資本主義は人類が個人單位の自由を認めらるゝ時、最も大なる能力を發揮するものなることを確認して居る。人類が自由を許さるゝ時、そこに利己が働きを開始する。併し之と同時に獨創が活躍することを看過

してはならぬ。利己は之を善用すれば、勤勞への拍車となすを得べく、獨創は之を解放して滯ほる所なき社會の進軍に寄與せしむることが出來る。資本主義は利己を制御するに緩漫に失する所があるが、活動を促し、獨創を刺戟する所に長所を有して來た。然れども資本主義は天下の指彈を受けるほどに、其の短所と缺陷とを有して居る。而して資本主義が所謂金融資本主義の形態を取るに及びて、其の短所と缺陷とは、一層甚しく强調せらるゝに至つた。然らば其の短所は邦邊に在るか。それは資本主義が公益を意識的に目的とせざる點にある。資本主義の定義する所によれば、人間は利己的存在である。之を自然に放任すれば、社會陶汰によりて適者生存の善果を結ぶものである。直接の働きは利己主義に發しても、其の結果として公益が來さるれば、社會の爲には自から好都合であると。然るに複雜なる現代社會に於て、個人と社會との關係は、左樣に簡單に調節せらるゝものでない。今や金融は國際的に發達して居る、所有權、管理權は非常に複雜化せられて居る。個人の自由に放任すれば、利己主義はそれ自身社會的に結成して、公益を侵害するに至つて居る。獨創發明は自由主義の下に活動せずして、資本主義の重壓の下に擡頭の機會を遮斷せらるゝに至つて居る。最早や個人と社會との調節作用を、無意識なる自然陶汰に一任することは出來なくなつた。どうしても其の缺陷を確認して意識的に公益を目的とする機能が必要視せらるゝに至つた。

社會主義の長所は意識的に公益を目的とするにある。彼等の信徒は勞働生産者の爲に經濟的支配力と政治的權力とを把握せんと欲して居る。而して社會主義の短所は人間性に對する根本認識を誤れる點にある。彼等は公益の爲なりと稱する意識及び名義の下に公益の爲に必要なる個人の自由を減殺する弊害に對して正當の認識を有しない。人類は其の自由を奪はるゝより、或る制限の下に自由を許さるゝ際に於て、積極的に公益增進の爲に貢獻するものである。然るに多くの社會主義者は個人單位の自由が全然社會の爲に不必要なるが如く、又個人的利己心が全然制度の力にて絕滅せしめられ得るが如く信じて居る。これは生物學的に人類の根本性能に對する認識を誤るものである。人間は感

覺に於て自分の痛いことは、自分で一番よく了解する。併し己れにまさる愛兒の痛さに就ては之を察し得るだけで、自分に感知することは出來ない。想像は其の極致に於ても體驗には及ばない。これは感覺以外の總ての性能に於ても然りである。快樂苦痛はそれが各人の範圍に於て最も熾烈である。それは唯物史觀にて說明するが如き制度慣習の結果では斷じてない。親が全部子の爲に考へてやるよりは、子をして自ら適當に考へしむるが子の爲に幸福である。然るに社會主義は資本主義の橫暴に反動する結果、「私益」其物を自由に委すれば、直ちに利己的資本主義に墮すべしと信じて居る。乃ち强制と命令の範圍を不必要に據大し、產業を國有にして公益一點張りの社會を建設せんと欲して居る。それは人間性を確認せず、人間性の自然的活動を善用するを知らざる妄斷である。其の目的として意識する所は社會的に善良であるが、其の手段として採用する所は人間性に逆行して居る斯の如く人間性能の根本を認識すれども、意識的に公益を目的とせざる資本主義と、意識的に公益を目的とすれども、手段として人間性の根本を利用するを知らざる社會主義とは、今や修羅場に並び立ちて、死活の爭を演出して居る。然るに正しき政治形態は意識として、公益を目的とし、人間性を根本的に認識して其の能力を醇化し、之を善用して社會に奉仕せしむるにある。乃ち政治は明確なる自信の上に立てる正しき裁斷者でなければならぬ。此の裁斷者たり指導者たるものは修羅場に爭へる資本主義と社會主義との雙方より、非常の反對と迫害とを受けることを覺悟せねばならぬ。若し政治が資本主義の傳統に盲從するか、社會主義の煽動に熱狂するかによりて、其の使命を果し得るなら、そこに聰明も要らねば强力も要らぬ。それは自由主義、中立主義、無所屬主義通有の追隨的態度で充分であらう。然るに政治は迷妄傳統とを克服し、亂世に正義を興すを以て任となすが故に、其の聰明と强力とは絕對的でなければならぬ。

六

今日の正しき政治形態は資本主義以前、共産主義以前の民主々義、若しくは自由主義であつてはならぬ。資本主義及び共産主義の理論と實驗とを認識した後の立場から目的を社會主義より、方法を資本主義より採用し、充分なる自信と決意と責任とを有するものでなくてはならぬ。自由主義者及び多數主義者は、旗印をも立てざる戰場のルンペンに等しい其の無所屬的日和見は、激流渦卷く現代社會では、根もなき浮草と同樣である。それでは或は資本主義の支配に奴隷的奉仕を甘んずるか、或は氣まぐれに變動するジャーナリズムの波に飜弄せらるゝか、畢竟自己の確信なくして、判決を一時の傾向に仰ぐの外に出づることが出來ない。我等の强力政治は社會の爲に社會を統制すべく、的確なる方針と鞏固なる推進力を有するものでなければならぬ。我等は資本主義より獨創と能率と向上心とを採用する。併し彼等の利己を抑制し、專横を抑壓し、その營利心を驅りて社會に奉仕せしむる。我等は個人の企業と所得に干涉するものでない、併し擔稅力の大小を考察し、租移制度と社會施設とによりて、國民所得の再吟味、再分配を實現する。我等は資本主義の活動を助成する、併し無用の競爭によりて資本と勞力とを濫費し、其の負擔を大衆に轉嫁するものに對して、公益統制を强制する。我等は資本主義が科學の進歩と機械の發明とを應用することを奬勵する。併し之が爲に失業に脅やかさるゝ、無辜の勞働者に對し、勞働時間の短縮、賃銀の增加、若しくは轉業の確實を保障せしむる。我等は機械を惡用して大衆を搾取することを許さない。寧ろ機械を驅使して勞働者の苦惱を除き、大衆の生活に奉仕せしむる。我等は米穀を肥料を蠶絲を、專賣には移さないが之を國家權力によりて管理統制する。我等は鐵道、電信、電話、電力すらも必ずしも國有官營を要としない。唯其の建設、運用に國家の統制を徹底せしめて、濫費と混雜と停滯と不便と其の經營過程に於ける勤勞階級よりの搾取を一掃する。斯の如きは寧ろ資本家の爲に安心立命の地を與へて、其の可能的發展力を保障するものである。斯の如きは寧ろ社會主義者の爲に架空の假說を淸算して、責任ある實行の効果を收穫するものである。併し優越を欲し、專横を欲し、利己を欲し、搾取を欲する資本家的習癖は、

容易に此の統制に服しないであらう。又彼の公式を信じ、假説に惑ひ、狂熱に浮かされたる社會主義的病弊は、直ちに之に反抗して罵詈讒謗を逞しうするであらう。而して微溫的なる自由主義は兩派の挾擊の間に介在して、揑造せられ、若しくば煽動せられたる輿論の波に飜弄せらるゝであらう自由主義者は決して資本主義的實力を矯正するの決意を持たねば、社會主義的激動を鎮壓するの自信も持ち得ない。彼等は自ら正確なる判斷と、明快なる認識とを有せざるが故に、自らの疑義を大衆に轉嫁して、漫に多數に間ひ輿論に聽くと稱して居る。然るに其の輿論なるものが往々にして揑造と宣傳と營利と黨略とに、歪めらるゝが故に、必ずしも個々の問題に對する適正なる指針たることは覺束ない。自信なくして多數に迎合するは、羅針盤なくして風に順ふと同樣である。

斯の如きは社會の矛盾を調節して健全なる動向に就かしむる所以でなく、寧ろ社會の混亂を激化して、建設なき破壞に赴かしむる所以である。永久に亘る多數の幸福を獲得せんが爲には、輿論の波の小起伏と共に浮沈してはならぬ。そこに千波萬波を凌ぎて、萬里の風濤を開拓するの强力がなければならぬ。殊に不況は激化し、生活は脅威せられ、信條は喪はれ迷信は横行する今日に於て、別して正確なる認識と自信ある强力とが必要である。

七

「皇路正夷なるに當つては、和を含んで明延に吐き、時窮しては節乃ち見はれ、一々丹青に垂る」とは社稷に殉せし詩人的忠臣の實感である。和を含み美辭を聯ねて、壇上の雄辯に花を咲かすは、天下泰平無事の時である。時運切迫して、風雲險惡なるに及んでは、緩頰善く説き、長袖麗しく舞ふに遑がない。直截明快、勇猛果敢の實行こそ、眞に世を救ふ所以である。往昔のアゼンスはペルシヤの挑戰に對し、イフの一字にラコニック・アンサアの範を示して、セルモピレイの險を死守した。ビスマルクは鐵と血あるのみと要言して、興國の一大決意を示した。クレマンソウは施政演説に、唯トラヴイエと

一言して、佛蘭西軍國の要務に精進した。英國は大戰中內閣內に少數の軍國會議を設けて、强力なる實行機關たらしめた。凡そ難に遇ひ、急に臨む時、空論よりは實行を急務とし、其の實行の任に當るべく、强力なる政治が待望さるゝのが通則である。

我等は是に於てか、內外の情勢に鑑みて、我日本に强力政治の必要を痛感する。併しながら强力政治の實行は、之を單なる個人の强力に期待すべきでない。强力の基礎は畢竟社會的必要を背景とする七千萬同胞の決意に求むべきである。社會的必要の急迫する所、强力政治は益々待望せらるゝ。而して强力政治家は國民要望の遂行者でなければならぬ。既に國民要望の遂行者なりと謂ふなら、其の任務を果す爲に眞に國民の要望する所が那邊にあるかを確認せねばならぬ。大衆は政治家の爲の大衆でない。寧ろ政治家は大衆の爲の政治家であつて、其の忠僕でなければならぬ。此の意味に於て國民の總意を遂行するを以て、政治の職能となすは正鵠を得たる概念である。然るに何が國民の總意であるかを正確に確認するには、そこに非常の苦心と準備とが必要である。それを街頭演說の聽衆によりて判斷することは出來ぬ。水ものゝジャーナリズムを盲信することは出來ぬ。無論一個人の獨斷によることは最大危險である。政治家の熱心と聰明とを極度まで公事に傾倒すると共に、國民の間に整然たる組織を設けて、其の要望を綜合的に反映せしめねばならぬ。其の所謂國民總意の反映を單なる普通選擧に問ふことは、經驗上既に其の失敗なるを立證した。今日の總選擧は斷じて眞の國民的要望を反映するものでない。選擧運動費と官權の力と場當りと、厚顏と、虛構と、泣き落しと、總ての不正手段とを、最も巧妙に使命することにより、勝利は殆んど間違ひなく獲得せられつゝある。從つて選擧は水ものである。水ものとして獲得せられたる勢力も亦水ものである。若し之を以て國民總意の反映なりと謂ひ得べくんば、それは歪められ、購はれ、强制せられ、煽動せられたる淺薄なる一時的反映である。總選擧決定の瞬間だけの脆弱なる反映である。隨つて其の反映は永續的壓力を有しない。國民は決して總選擧の結果を神聖視しない。之を蹂躙せらるゝも、憤らずそれが變節改論するも、怪まず、風馬牛相關せ

ざるが如き態度を示して居る。是に於てか民政黨が二百七十名の代議士を揃ふるも、政友會が三百餘名の頭數を纏むるも、毫も其の背後に强硬なる國民的壓力を持ち得ない。現に强力なるべき筈の政友會總裁が、噂の鐵腕は何處に置き忘れしか、吹き荒む嵐の前に首を縮めて、蟲の息を殺して居る。之を以て個人の勇怯を判斷するは誤りである。絕大多數を擁する政友會に、强力なる國民的支援がないからである。今や兩大政黨は政治に對して全く發言權を喪失し、國民に對して全く代表權を放棄しながら、漸く忍從のシビレを切らして、憲政常道の復歸、議會政治の復活を目錄んで居る。過去の如き總選擧なら、既に國民の總意を反映することに失敗の實證を示して居る。斯の如き基礎の上に運用せらるゝのが議院政治だとするなら、日本の議院制度は完全に其の無能を暴露した。議院政治を信仰するは宜しい、既成政黨の醜態を其儘治療を加へずして、漫に政權慾を滿足せしめんが爲なりとせば、自覺せる國民斷々乎として、之を認容得しない。

然らば議會を通じて强力政治を行はんとすれば、其の背後に國民的强力組織が必要である。既成政黨の選擧戰術たる地盤の獲得と、黨勢擴張とでは用をなさぬ。須らく、地域別に、職業別に、生産消費關係別に健全なる組織を設けねばならぬ。別して生産力の中樞を握る勞働者、農民の集團的結成を强化せねばならぬ。而して此等の各組織は夫々の體驗と研究とにより、利害を考査して要求を精選すべきである。政治家は此等の各組織單位より出づる要求を綜合比較して、國民大衆の利害に歸納し、隨時應急の對策と、恒久不變の政策とを確立遂行せねばならぬ。そこに組織の妙用がなければならぬ。そこに政治家の聰明が働かねばならぬ。加之、政治的集團の中央本部には、幾多のエキスパアトを集めて、參謀本部の機能を發揮し、中央會議、代表會議を通じて、政治家の聰明と地方の實情とを相疏通せしめねばならぬ。斯くして國民的要望を精査し、斯くて國民の總意を組織的に反映し、之を背景とし、之を支援とすることによりてのみ、强力にして聰明なる政治を實行し得べきである。議院政治は今の儘では覺束ない、其の背後に强力なる國民的組織が必要である。

レイニンはデモクラシイを基礎とする中央集權政治を表現するに、デモクラチック・センツリズム（センツラリズム）の術語を以てして居る。此の思想と此の表現の是非は別とし、斷乎たる革新と適正なる施設とを行はんとすれば、背景と目的とを大衆に置き執行手段を少數專制に委せる政治機構を確立せねばならぬ。行政も政治も、素人の片手間仕事によりて行はるべきでなく、これを生命とする玄人の專任によりて能率を發揮すべきである。隨つて議會の討論は大本的、政治的であるべくして、末節的、技術的であるべきでない。政治と行政の分野を混同し議員が私利黨益を挾みて、官場の空氣を汚濁するなど、最も唾棄すべき行爲である。議員は中央、地方に亘る政團組織の活動を通じて、全國民の利害を考査し、之を世界列國との接觸に鑑みて、政治方針の決定に參劃すべきものである。此立場に立ちて國民の要望を行ひ、政府の施設を鞭撻、監督、最正すべきである。唯夫れ其の背後に組織せられたる國民的要望がある。夫れ故に其の言論に權威を有すべきである。

內閣も亦强力政治機關たらしむべく、其の根本官制を改めねばならぬ。今日の內閣は各省大臣の寄合所である。各省大臣は……、……、閣議に豫算分捕の俗務を稼ぐに過ぎない。各省大臣に政治的見識なきは個人……によると共に、各省大臣を出せし政黨に國民的要望を象徵する政見なきに起因する。而して今日の內閣織理大臣は屬僚的書記官長を有するのみで、其の政治的見識を整理すべきスタッフを有しない。……。閣議に於ける各大臣の言議は、國民の總意を反映せずして、……を代辯する。偶々大臣自發の言議ありとすれば、そは……若しくば……の利益を反映して行政の公平を……過ぎない。斯くて屬僚の頤使に操らるゝ各省大臣の主張は、……總理大臣の調停によりて、取捨決定せられ、それが……大方針なりと觸れ出されて居る。更に今少しく內面を覗きて豫算決定の順序を叙述すれば、一層……である。先づ各省の豫算を編成する屬僚は、成案を持して大藏省の主計局長に折衝する、主計局長は下僚に審査を命じ、之を大藏

大臣の査定案なりとして閣議に報告する。是に於ては各省大臣は背後の屬僚に鞭撻せられ、閣議の席上或は訴へ、或は怒り、或は泣きつきて、削減費目の復活を要求する。それを情實により、駈引により、旨く始末をつくれば、……閣議の任務は是に盡くるのである。斯くて日本國の内閣は、……、……、……、……、……、……、毫も有機的統一なきバラ〳〵の各省事務を決定するに過ぎない。

我等は是に於てか内閣制を廢止し、各省大臣を以て省長官となし、別に國務院を設けて強力政治機關となし、定員七名の國務大臣を置きて、根本的經綸を行はんことを主張する。國務院の首班は總理大臣であり、各國務大臣は原則として無任所大臣とする。併し國務大臣は同時に大藏、外務、軍部の省長官を兼ねるを得しめ、以て財政、外交、國防の有機化一元化を要望する。乃ち軍部は實際に於て省長官を國務大臣となし、國務と軍務の調節を圖る次第である。斯くて行政と政務との分界は定められ、輔弼の責任は明確となりて、重要國策は決定遂行せらるべきである。是に最も注意すべきは、國務と軍務との關係である。國務院は天皇を奉體して、國民の要望を行ふものである。而して陛下の皇軍は同時に國民の國軍であつて、國民大衆の基礎に立つて居る。乃ち國務も國民を基礎とし、國軍も國民を基礎とする。兵營は卽ち社會の縮圖であり、軍隊の士氣は國民の元氣を反映する。是に於てか國務院は國民を通じて國務と軍務を一元化すべきである。軍部長官が國務院に列する時、國務としての軍政に任ずべきである。而して政治家は國民大衆を通じてのみ軍部と握手すべきである。此の調節を合理化し、完全化し、有機化してこそ、強力政治は内外に其の職能を發揮し得べきである。強力政治は國際及び國内社會の實體と、人間性の本質とを正確に認識し、眞の國民的必要を親切、熱心、鄭重に考察し、之を聰明に質し、之を組織に諮り、社會の爲に社會を統制するものでなければならぬ。強力政治は國際に暢展し、國内に徹底し、世界の良心に訴へ、無辜の良民に問ひ奪へども沮まるゝなく、抑ふれども恨まるゝなき、公正、純眞、無私、

明快なる力の發動でなければならぬ。

國家改造計畫綱領（終）

昭和八年十月二十四日印刷
昭和八年十月二十八日發行

『國家改造計畫綱領』奥付
定價五十錢

著作者　中野正剛
東京市京橋區京橋三ノ一
發行者　千倉豐
東京市神田區今川小路一ノ一
印刷者　山縣精一

山縣製本印刷株式會社印刷

版權所有

發行所　東京・京橋　千倉書房
節一相互館　電話京橋(56)三一一七一八六七一
振替東京九七八

◇好評重版◇

世界危機一九三六年！

小島精一著

價一圓五〇錢　送料一〇錢

世界經濟鬪爭史

白柳秀湖著

價一圓六〇錢　送料一〇錢

卅版突破!!

來るべき一九三六年を以つて世界未曾有の大危機なりと警告するはいかなる意味か？　各國競つて擴大せんとする大規模なるインフレ政策の大反動はいかなる時期にいかなる形で爆發するか？又夫々狂奔沒頭する深刻なる排他的經濟政策はいかなる歸結に到達するか？　米國財界今後の動向、英國排日政策の本體、ソヴエート外交の變化、その間に於ける日本の國際的進路等々の重大難題の解明とその對策は、ただ世界的大危機一九三六年の意義を掴むことによつて始めて可能である！　各國の經濟式裝いまや着々進行せんとす。我が經濟人は一人殘らず本書によつて速かに積極的對策を樹立せよ！

最新刊

世界の再分裂時代來る！　アメリカ政府のキューヴア革命彈壓、獨墺關係の激化、日本に當る米支航空密約、日英經濟戰の激化等々。これ何れも來らんとする世界大動亂前夜の前哨戰に非ずして何ぞや？　一片のレーニン式帝國主義理論や、粗大幼稚なる觀念的感傷論を以つてしては、現下國際葛藤の行衛と、一大轉換期に在る日本の國際的地位の前途を觀知することは斷じて不可能だ。本書は史論界の大御所として獨自の存在をなす著者が、凡百の史書の描き得ざりし豐富多彩なる生々しき事實を拉し來り、得意の史的方法を用ひて各國資本主義の本質と各國帝國主義政策を具さに解明し次に英・米・佛・露の再びアジアに殺到することの因由、情實を暴露して、國際非常時下の大衆を啓蒙せんとした一大快著である！

東京第一・相模・京橋互館　千倉書房　振替東京九七八

◀政治理論參考書▶

沈滯日本の更生	國家論	ファシスト國家論	マルクシズムとボルシエヰズム	日本財政經濟論
	法政大學教授	同志社大學助教授	慶應大學教授	日本銀行調査局長
中野正剛著	堀眞琴著	具島兼三郎著	小泉信三著	洪純一著
價￥0.30 送￥0.04	價￥2.30 送￥0.14	價￥1.50 送￥0.10	價￥2.30 送￥0.14	價￥3.00 送￥0.22

東京第一・相模・京橋互館　千倉書房　振替東京九七八

著者	書名	定價	送料
高田保馬著	價格と獨占	二・三〇	一・二〇
勝正憲著	稅の話(十三版)	一・五〇	〇・八〇
那須皓著	日本農業論(再版)	二・五〇	一・五〇
高橋亀吉著	資本主義頽廢の諸相	二・二〇	一・二〇
美濃部達吉著	行政裁判法	二・八〇	一・八〇
小泉信三著	マルクシズムとボルシエヰズム(再版)	二・三〇	一・二〇
小島精一著	日本金融資本論(再版)	二・五〇	一・二〇
報知新聞調査部編	談話室(四版)	一・五〇	一・〇〇
高橋亀吉著	實用經濟學(五版)	一・八〇	一・二〇
平林初之輔著	文學理論の諸問題	一・八〇	一・二〇
井上準之助著	國民經濟の立直と金解禁(三百版)	三・〇〇	一・四〇
河合榮治郎著	英國勞働黨のイデオロギー	五〇	一・四〇
清澤洌著	轉換期の日本(五版)	一・八〇	一・二〇
東京日日學藝課編	常識百話(五版)	一・五〇	一・二〇
白柳秀湖著	日本經濟革命史(五版)	一・八〇	一・二〇
小島昌太郎著	海運經濟要論	二・五〇	一・二〇
水上鐵治郎著	英國の勞働組合	五〇	一・〇四
小島精一著	產業合理化(十五版)	一・五〇	一・二八
向井鹿松著	經營經濟學總論(十二版)	一・五〇	一・二八
上野陽一著	產業能率論(十二版)	一・五〇	一・二八
松永安左衛門著	產業改造への途(五十版)	八〇	〇・六
白柳秀湖著	親分子分(英雄編)(十版)	一・五〇	一・二〇
高橋亀吉著	『經濟國難來』(五版)	一・五〇	一・二〇
報知新聞調査部編	談話室漫談篇(五版)	一・五〇	一・二〇
平林初之輔著	近世社會思想講話	一・八〇	一・二〇
永井亨著	社會の話(五版)	一・五〇	一・二〇
中川靜著	廣告論	一・五〇	一・二八
山川均著	社會主義の話(六版)	一・五〇	一・二〇
白柳秀湖著	親分子分(俠客編)(七版)	一・五〇	一・二〇
大崎厚夫著	世界を動かす十二傑(五版)	一・五〇	一・二〇

著者	書名	定價	送料
勝正憲著	所得稅の話(七版)	一・六〇	一・二〇
報知新聞經濟部編	能率增進時代(五版)	一・五〇	一・二〇
福田敬太郎著	市場論(九版)	一・五〇	一・二〇
政經研究會編	各政黨の主張(三十版)	三〇	〇・四〇
土田杏村著	文明は何處へ行く(五版)	一・五〇	一・二〇
增地庸治郎著	企業形態論(八版)	一・五〇	一・二八
小島精一著	世界經濟と合理化運動(五版)	一・五〇	一・二〇
白柳秀湖著	親分子分(浪人編)(七版)	一・五〇	一・二〇
小林行昌著	資買論(九版)	一・五〇	一・二八
石濱知行著	アメリカ資本主義發達史(四版)	一・七〇	一・二〇
小林行昌著	關稅と物價	二・五〇	一・二八
末弘嚴太郎共野間海造編	農林法規集	五・〇〇	二四
小島精一著	企業統制論(七版)	一・五〇	一・二八
神長倉眞民著	財界巡禮記(五版)	一・五〇	一・二〇
報知新聞調査部編	ナンセンス・ジャパン(五版)	一・五〇	一・二〇
長野朗著	支那の眞相(五版)	一・五〇	一・二〇
武野藤介著	文士の側面裏面(五版)	一・五〇	一・二〇
上野陽一著	能率祕話(十二版)	一・五〇	一・二〇
中外經濟商業部編	經濟國難打開の途(五版)	一・五〇	一・二〇
細田民樹著	黑の死刑女囚(五版)	一・五〇	一・二〇
藤井悌著	英國勞働黨の組織・沿革・政策	五〇	〇・四〇
藤本幸太郎著	海上保險論(七版)	一・五〇	一・二八
上野陽一著	家庭經濟の祕訣(十版)	九〇	〇・八〇
勝正憲著	企業と租稅(七版)	一・五〇	一・二八
報知新聞經濟部編	經濟相談(十版)	一・五〇	一・二〇
堀眞琴著	國家論	二・三〇	一・四〇
堀光龜著	海運(八版)	一・五〇	一・二八
增井幸雄著	陸運(七版)	一・五〇	一・二八
山川均著	勞働組合の話(四版)	一・五〇	一・二〇
世界經濟研究所編	世界經濟(總觀)(七版)	一・五〇	一・二四

著者	書名	定價	送料
前田美稻著	豫算の知識（三版）	一・五〇	一〇
佐藤弘著	世界經濟地理（八版）	一・五〇	一八
米野豐實著	サウエート經濟の實體	一・五〇	一〇
中村第三著	販賣革命（六版）	一・二〇	一〇
高木友三郎著	日本經濟の實體（四版）	一・〇〇	一〇
勝田貞次著	投資相談（十五版）	一・五〇	一〇
勝田貞次著	獨逸財界の機構（三版）	一・八〇	一〇
小池四郎著	社會主義か資本主義か	一・二〇	一〇
大辻司郎著	漫談集	一・〇〇	〇八
白柳秀湖著	社會展開の動力（三版）	一・六〇	一〇
上田貞次郎著	商工經營（十版）	一・五〇	一八
山田忍三著	百貨店經營と小賣業	一・五〇	一〇
後藤朝太郎著	哲人支那	一・五〇	一〇
報知新聞調査部編	ユーモア百話（六版）	一・五〇	一〇
小島精一著	アメリカ恐慌の見透し	一・〇〇	〇六
林恒彥著	生活指導	一・五〇	一〇
帝國大學新聞編輯部編	大學の運命と使命	一・五〇	一〇
清澤洌著	アメリカを裸體にす（十三版）	一・五〇	一〇
三邊金藏著	會計監査（八版）	一・五〇	一八
北林惣吉著	淺野總一郎傳（十版）	一・五〇	一〇
報知新聞經濟部編	中小產業の活路	一・八〇	一二
勝田貞次著	不景氣時代の投資法（十版）	一・五〇	一〇
白柳秀湖著	食慾と愛慾（六版）	一・六〇	一〇
勝正憲著	營業收益稅の話（八版）	一・五〇	一〇
國松豐著	工場經營論（六版）	一・五〇	一八
青野季吉著	實踐的文學論	一・六〇	一〇
北野大吉著	婦人運動の開祖 メリー・ウオルストンクラフト	一・五〇	一〇
小汀利得著	街頭經濟學（十九版）	一・五〇	一〇
近松秋江著	文壇三十年	一・八〇	一〇
北林惣吉著	淺野翁ヲ人正傳 女の一心	一・二〇	一〇

著者	書名	定價	送料
野守廣内藤章著	信託經營論	一・五〇	一八
木村毅著	巴里情痴傳（五版）	一・五〇	一〇
宮川貞一郎譯	金本位制度の理論と實際	一・三〇	一〇
佐々弘雄著	政治の貧困	一・五〇	一〇
北林惣吉著	淺野翁物語 成功祕談	一・五〇	一〇
井關孝雄著	金融の常識（七版）	一・五〇	一〇
白柳秀湖著	住友物語（十二版）	一・五〇	一〇
小林新著	經營統計（七版）	一・五〇	一八
山崎靖純著	何が財界を動かすか（九版）	一・五〇	一〇
北林惣吉著	投資基礎學（四版）	一・五〇	一〇
内池廉吉著	倉庫論（七版）	一・五〇	一八
清澤洌著	不安世界の大通り（九版）	一・五〇	一〇
勝田貞次著	投資の仕方（三版）	一・五〇	一〇
木村毅著	ラグーザお玉（五版）	一・八〇	一〇
報知新聞經濟部編	財界を牛耳る人々（九版）	一・五〇	一〇
高橋亀吉著	景氣はドウなる（九版）	一・五〇	一〇
勝田貞次著	景氣の見方（三版）	一・五〇	一〇
福田敬太郎著	商業概論（六版）	一・五〇	一八
太田哲三著	銀行簿記の常識（五版）	一・〇〇	一〇
上野陽一著	販賣心理（五版）	一・五〇	一八
都新聞峰島編	法律相談（六版）	一・五〇	一〇
都新聞峰島編	衞生相談（五版）	一・五〇	一〇
アインチヒ著 山本米治譯	國際金融爭覇戰（七版）	一・〇〇	一〇
報知新聞經濟部編	小資本開業案內（六版）	一・五〇	一〇
藤田國之助著	取引所論（五版）	一・五〇	一八
黑澤清著	商業簿記の常識（五版）	一・〇〇	一〇
山崎靖純著	フーヴァ景氣はドウなる（五十九版）	一・三〇	〇四
半野喜二著	世界市場を舞ふロシア五ケ年計畫（廿五版）	一・五〇	〇四
國民新聞政治部編	明日を待つ彼	一・五〇	一〇
中外商業新報社編	尖端的販賣戰術（五版）	一・五〇	一〇

著者	書名	定價	送料
中野正剛著	沈溺日本の更生（五十版）	一〇〇	三〇
井關十二郎著	販賣の常識	一〇〇	一〇
坂口武之助著	商品學	一五〇	一八
小林行昌著	商業算術の常識（五版）	一〇〇	一〇
山川均著	無產政黨の話（三版）	一五〇	一〇
加藤三郎譯	世界商業祕話	一六〇	一〇
アインチヒ著 木村禧八郎譯	世界經濟恐慌の解剖（五版）	一二〇	一〇
高島佐一郎著	金融統制論	一五〇	一八
白柳秀湖著	日本富豪發生學（下士階級革命の危）	一六〇	一〇
デニー著 香月保譯	アメリカの世界經濟征服（八版）	一五〇	一〇
松本烝治著	商法改正の話（著譯としての）	〇五〇	〇四
本多熊太郎著	日本の立場（世界の動きと）（五十版）	〇三〇	〇四
木村禧八郎著	金本位制の危機（卅五版）	〇三〇	〇四
金子利八郎著	事務管理總論	一〇〇	一〇
佐藤弘著	商品學の常識	一〇〇	一〇

著者	書名	定價	送料
村瀨玄著	工業會計の常識	一〇〇	一〇
藤本幸太郎著	商業統計の常識	一〇〇	一〇
内池廉吉著	商業學の常識	一〇〇	一〇
小松綠著	維新革命祕話	二〇〇	一四
ベンネット著 森田敏譯	人生如何に生くべきか	一〇〇	一〇
パッターソン著 伊地知軍司譯	列强經濟のヂレンマ	一二〇	一〇
長野朗著	動亂支那の眞相	一〇〇	一〇
武藤山治著	金輸出再禁止（百版）（景氣轉換策としての）	〇三〇	〇四
長野朗著	滿蒙（廿五版）（暗雲たゞよふ）	〇三〇	〇四
同著	滿蒙併呑か獨立？（廿版）（滿蒙に於ける）	〇三〇	〇四
同著	列强侵略戰（廿版）（滿蒙に於ける）	〇三〇	〇四
後藤朝太郎著	支那の民情（廿版）（時代に逆らす）	〇三〇	〇四
吉田良三著	會計學の常識	一〇〇	一〇
ホブソン著 中島敬三譯	世界經濟の統一	一〇〇	一〇
佐々木道雄著	商業數學	一五〇	一八

著者	書名	定價	送料
コール著 清水元譯	經濟の國家統制（五版）	二〇〇	一六
高島佐一郎著	金本位制動搖と日本金融の將來（八版）	一二〇	一〇
原口亮平著	簿記學	一五〇	一八
白柳秀湖著	日本富豪發生學（閥族財閥爭奪の卷）	一六〇	一四
小原喜三郎譯	物富み人富まざるの矛盾	一〇〇	一〇
高橋亀吉著	日本經濟の變革（世界破局と）（七版）	一五〇	一四
保科貞次著	空襲!!（廿版）	一〇〇	一〇
猪谷善一著	アジヤ經濟の展望	一五〇	一〇
洪紹一 モールトン著	日本財政經濟論（四版）	三〇〇	二四
伊豆富人著	安達さんの心境を語る（八十版）	〇三〇	〇四
森田久著	弗賓買の解剖（百版）	〇三〇	〇四
平井泰太郎著	經營學文獻解說	一五〇	一八
中野正剛著	轉換日本の動向（廿版）	〇三〇	〇四
アインチヒ著 木村禧八郎譯	世界金融恐慌の眞相	一二〇	一〇
井上準之助著	金再禁止と我財界の前途（百版）	〇三〇	〇四

著者	書名	定價	送料
小汀利得著	漫談經濟學（卅五版）	一五〇	一〇
中外商業新報社編	政治家群像（五版）	一五〇	一〇
上野陽一著	經營作戰（七版）	一五〇	一〇
森山四郎著	滿蒙小資本開業案內（卅版）	一二〇	一〇
高木友三郎著	東亞モンロー主義への驀進（廿版）	〇三〇	〇四
佐々木良雄著	販賣祕法	一五〇	一〇
平井泰太郎著	經營學の常識（四版）	一〇〇	一〇
ロオレンス著 渡邊進譯	此の金恐慌（五版）	一二〇	一〇
勝田貞次著	相場戰術（十五版）	一八〇	一〇
武藤山治著	我財界の緊急對策（インフレーションとは何か？）	〇五〇	〇四
高垣寅次郎 金子弘著	產業心理學	一五〇	一八
報知新聞經濟部編	滿洲國の開發（と日本經濟の動向）	一二〇	一〇
宇野木忠著	伯樂＝澁澤翁（十版）	一〇〇	〇八
高橋亀吉著	變革期の財界と其對策（九版）	一五〇	一〇
報知新聞經濟部編	相場實話（五版）	一五〇	一〇

著者	書名	定價
白柳秀湖著	現代財閥罪惡史(普版)	價一・六〇 送料・一〇
土田杏村著	現代世相論(廿版)	價一・五〇 送料・一〇
河合良成著	非常時の經濟對策(七萬)	價〇・三〇 送料・〇四
小島精一著	日本計畫經濟論(十版)	價一・八〇 送料・一二
木村毅著	S・O・Sのアメリカ	價一・五〇 送料・一〇
勝田貞次著	富の分布か新平價か?	價一・五〇 送料・一〇
ペーシュ著 加藤直士譯	景氣轉換論	價一・二〇 送料・一〇
横尾驍三郎著	農村非常對策(廿萬)	價〇・三〇 送料・〇四
マハン大佐著 尾崎中佐譯	米國海軍戰略	價二・五〇 送料・一二
長崎英造譯	歷史は繰返すか	價〇・三五 送料・〇四
高橋亀吉著	經濟學の基礎知識(十五版)	價一・五〇 送料・一二
山道襄著	日本再建論(十萬)	價〇・三〇 送料・〇四
谷口吉彦著	購買力補給案(十五版)	價一・五〇 送料・一二
平井泰太郎著	經營學入門	價二・三〇 送料・一四
上野陽一著	計畫經濟と管理法	價一・五〇 送料・一〇

著者	書名	定價
高島佐一郎著	金本位の後に來るもの(八版)	價一・八〇 送料・一二
增地庸治郎著	商業通論	價一・五〇 送料・一八
山本勝市著	經濟計算	價一・五〇 送料・一〇
山崎靖純著	圓爲替はどうなる(卅版)	價〇・三〇 送料・〇四
小原喜三郎著	南北分水嶺を越えて	價一・〇〇 送料・〇八
白柳秀湖著	親分子分(政黨編)	價一・五〇 送料・一〇
勝正憲著	相續稅の話	價一・五〇 送料・一〇
安部磯雄著	產業奉還論	價〇・三〇 送料・〇四
尾崎行雄著	世界審判の岐路に立つ日本	價〇・三〇 送料・〇四
清澤洌著	アメリカは日本と戰はず(廿版)	價一・五〇 送料・一二
高橋亀吉著	景氣轉換期	價一・五〇 送料・一二
小島精一著	日滿經濟ブロック問答	價〇・三〇 送料・〇四
藤山雷太著	鮮支遊記	非賣品
野村證券調査部	爲替低落と上向期の主要產業	價二・三〇 送料・一二
喜多壯一郎著	ジャアナリズムの理論と現象	價一・五〇 送料・一〇

著者	書名	定價
宇原義豐著	日本產業革命論	價二・〇〇 送料・一四
佐々弘雄著	政局危機の動向	價一・五〇 送料・一〇
マツケンナ著 前馬治一譯	金融政策十四年	價一・五〇 送料・一〇
白柳秀湖著	日本外交の血路(九版)	價一・五〇 送料・一〇
白柳秀湖著	『親分子分』英雄編(普及版)	價一・〇〇 送料・一〇
白柳秀湖著	『親分子分』俠客編(普及版)	價一・〇〇 送料・一〇
白柳秀湖著	『親分子分』浪人編(普及版)	價一・〇〇 送料・一〇
太田哲三著	會計制度論	價一・五〇 送料・一八
勝田貞次著	1933 投資相談(六十五版)	價一・五〇 送料・一〇
山川均著	世相を語る XYZの對話	價一・五〇 送料・一〇
土田杏村著	意想・人物・時代(十五版)	價一・五〇 送料・一〇
中外商業商店欄編	經營祕話	價一・五〇 送料・一〇
清水芳太郎著	日本經濟革命論(八版)	價一・五〇 送料・一〇
山崎幸四郎編	農林副業と共同販賣	價一・五〇 送料・一〇
小汀利得著	金より物へ(七十五版)	價一・五〇 送料・一〇
モンカド著 清澤洌著	亞細亞モンロー主義(六版)	價一・五〇 送料・一〇

著者	書名	定價
國地與四松著	インフレ景氣論(五版)	價一・五〇 送料・一〇
上野陽一著	能率百話(八版)	價一・五〇 送料・一〇
高橋亀吉著	非常時經濟(十五版)	價一・五〇 送料・一〇
鎌田澤一郎著	朝鮮は起ち上る(廿版)	價一・五〇 送料・一〇
谷口吉彦著	爲替理論と爲替問題(廿版)	價二・三〇 送料・一四
清澤洌著	非常日本への直言(六版)	價一・五〇 送料・一〇
勝田貞次著	金本位恐慌後の投資對策(十二版)	價一・五〇 送料・一〇
小島精一著	金融恐慌論(十版)	價一・五〇 送料・一〇
木村毅著	世界の女性を語る	價一・五〇 送料・一〇
畑桃作著	國策を守れ	價〇・五〇 送料・〇四
佐々弘雄著	街頭政治讀本	價一・五〇 送料・一〇
黑田禮二著	革命三人男	價一・五〇 送料・一二
澤田謙著	獨裁期來!	價一・五〇 送料・一〇
高橋亀吉著	清算期世界經濟と日本	價一・五〇 送料・一〇
白柳秀湖著	左傾兒とその父	價一・五〇 送料・一〇
室伏高信著	マルクスを乘り越えて	價一・五〇 送料・一〇

久保久治著	金融革命宣言	價一・二〇	送料・一〇
高島佐一郎著	金融景氣とその限界	價一・五〇	送料・一〇
佐々木良雄著	科學的商店經營法（滑五版）	價一・五〇	送料・一〇
黒田證二著	最後に笑ふ者	價一・五〇	送料・一〇
上野陽一著	能率茶話	價一・五〇	送料・一〇
勝田貞次著	投資秘話（廿五版）	價一・五〇	送料・一〇
黒澤清著	會計學（三版）	價二・五〇	送料・一四
保科貞次著	空襲（普及版）	價・八〇	送料・〇八
渡邊進著	ハツ・世界經濟新體系論	價一・二〇	送料・〇八
平井泰太郎著	經濟座談	價一・五〇	送料・一〇
小島精一著	世界危機一九三六年！（滑版）	價一・五〇	送料・一〇
小島昌太郎著	日本金融工作論（再版）	價一・五〇	送料・一〇
菅谷北斗星著	棋道秘話（十五版）	價一・五〇	送料・一〇
白柳秀湖著	世界經濟鬪爭史（再版）	價一・六〇	送料・一二
清水芳太郎著	金力・權力・武力	價一・二〇	送料・一〇
田中蒲三著	科學的工場經營法（再版）	價二・〇〇	送料・一四
室伏高信著	現代文明講話	價・一五〇	送料・一〇
栗林正修著	投資者必携（再版）	價一・五〇	送料・一〇
具島兼三郎著	ファツシスト國家論	價一・五〇	送料・一〇
谷口吉彦著	國際經濟の理論と問題	價二・五〇	送料・一四
吉村觀水著	觀相科學	價一・五〇	送料・一〇
ジョンソン著	英帝國の野心	價一・〇〇	送料・一〇
佐々木良雄著	實益的商店經營學	價一・五〇	送料・〇
中野正剛著	國家改造計畫綱領	價・五〇	送料・〇四

第十號